

1 主題役割 (§10.1)

- 主題役割 (thematic roles) : 状況に關与する参与者 (participant) の一般的分類。
- 類似の概念 : θ 役割 (θ -role)、主題關係 (thematic relations)、格役割／關係 (case roles/relations)、参与者役割 (participant roles)
- 普通、意味論そのものではなく、統語論（と意味論のインターフェース）で論じられる。
- 語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure; LCS) の理論は、主題役割を意味表示に取り込む。

2 伝統的な主題役割 (§10.2)

- 統語論の教科書では、主題役割がリストとして提示される。
- いくつの（そして、どの）主題役割が存在するのか、必要なのかについて見解の一致はない。

- (1)
 - a. Aarts (1997:88)
動作主 (agent), 被動者 (patient), 経験者 (experiencer), 着点 (goal), 受益者 (benefactive), 起点 (source), 道具 (instrument), 場所 (locative)
 - b. Carnie (2007:231)
動作主 (agent), 経験者 (experiencer), 対象 (theme), 着点 (goal), 受け手 (recipient), 起点 (source), 場所 (location), 道具 (instrument), 受益者 (beneficiary), 命題 (proposition)
 - c. Radford (1988:373)
被動者・対象 (theme/patient), 動作主・行為者 (agent/actor), 経験者 (experiencer), 受益者 (benefactive), 道具 (instrument), 場所 (locative), 着点 (goal), 起点 (source)

2.1 動作主・行為者と被動者 (§10.2.1)

- (2)
 - a. 動作主 (A) = する側
 - b. 被動者 (P) = される側
- (3) 健 (A) が直美 (P) を叩いた。
- (4) 動作主となる要因 (a–d : 有生物のみ、e–h : 有生物も無生物も)
 - a. 意思 (volition) を持つ。出来事や状態に積極的に關与すること。
 - b. 出来事や状態に対する關与を制御できる。
 - c. 出来事を故意に始められる。
 - d. 意識、感覚、知覚を持つ。
 - e. 出来事や状態を始めたり、引き起こしたりする。

- f. 他の事物に対して向けられる力の出所。
- g. 動く事物。静止している他の事物に接触するようになる。
- h. 静止している背景や静止している他の事物に対して動く事物。つまり、A は図と地の関係における図。

- 哲学における動作主性 (agentivity) は、より狭い概念で、(4a)–(4c) のみに関わる。
- そのため、「動作主」という用語は曖昧。
- Kearns は、広い意味では行為者 (Actor)、狭い意味では動作主 (agent) を用いている。

動作主性のテスト

(5) persuade の補部に生起できる

- a. Jones persuaded [Bianca to try the veal].
→ ビアンカが子牛肉を食べてみるのは、動作主性を持った（主體的な）出来事。よって、Bianca は動作主。
- b. #Jones persuaded [Bianca to be happy].

(6) 命令文に生起できる

- a. Shut that door!
→ あのドアを閉めることは、動作主性を持った出来事。よって、その隠在的行為者（主語）は動作主。
- b. #Be happy!

(7) carelessly や deliberately のような副詞で修飾できる

- a. Jones carelessly left the door open.
→ ジョーンズがドアを開けておくことは、動作主性を持った出来事。よって、Jones は動作主。
- b. #Jones was carelessly happy.

carelessly は、状況に対する制御力を前提とする。

(8) 被動者となる要因 (a–c：変化を伴う、d–f：変化を伴ったり伴わなかったりする)

- a. 出来事の最終点への状態変化を起こす。完全な状態変化。
- b. 指定された終着点への移動を起こす。
- c. 必ずしも終着点に至るわけではないにしろ、出来事の中で状態変化を起こす。
受影性 (affectedness)：何らかの形で、出来事または状態により影響され、変化させられる。
- d. 他の事物の接触を伴う移動や行動の静止したターゲットとなる。
- e. 他の事物からの力のターゲットとなる。
- f. 出来事や状態において、制御力や因果関係的影響力を欠く。

行為者 (A) または被動者 (P) となる要因の関係

- (9) 独立（強い要因）
- a. 行為者
 - (i) 意思 (volition) および制御力 (control)
 - (ii) 出来事を引き起こす
 - b. 被動者

指定された状態への変化を起こす
- (10) 相対的（弱い要因）
- a. A は意識や感覚を持つのにに対し、P は必ずしも持たない。
 - b. A は動くのにに対し、P は静止している。
 - c. A は力の源であるのにに対し、P は力の向かう先である。

2.2 場所理論的役割 (§10.2.2)

- 場所理論的役割 (localist role) は、空間的・比喩的移動や位置の概念に基づくものである。

- (11) a. 対象 (theme)：移動する事物
 b. 起点 (source)：そこから対象が動くような場所
 c. 着点 (goal)：そこへ対象が動くような場所
 d. 場所 (location)：対象が位置する場所
 e. 経路 (path)：対象の動く道筋
- (12) a. [対象 The ball] rolled [起点 out of the bag].
 (OR ... out of [起点 the bag])
 b. [対象 The ball] rolled [着点 into the pocket].
 (OR ... into [着点 the pocket])
 c. [対象 The ball] rolled [着点 away].
- (13) [対象 The jug] remained [場所 on the table].
- (14) [対象 Jones] ran [経路 along the cinder path].

状態変化 = $\neg X$ から X への比喩的移動

- (15) a. [対象 The curtain] faded.
 b. [対象 The curtain] turned [着点 purple].

Q. 以下の放出動詞 (verbs of emission) を伴う文に関する主題役割は何か？

- (16) a. The rocks dripped water.
 b. The chimney belched thick brown smoke.

2.3 受け手と受益者 (§10.2.3)

- 所有の比喩的移動

- (17) a. **受け手** (recipient) : 対象を受け取る事物。対象が受け手の所有へと移動する。
 b. **受益者** (benefactive/beneficiary) : 対称の意図された所有者。必ずしも実際の所有者ではない。
- (18) a. Jones gave [対象 the scraps] [受け手 to the dog].
 b. Jones gave [受け手 the dog] [対象 the scraps]. (二重目的語構文)
- (19) a. Jones made [対象 a new kennel] [受益者 for the dog].
 b. Jones made [受益者 the dog] [対象 a new kennel]. (二重目的語構文)

- 着点は二重目的語構文に出られない。

- (20) a. Jones whacked [対象 the ball] [着点 to the wall].
 b. *Jones whacked [着点 the wall] [対象 the ball]. (二重目的語構文)

2.4 経験者と刺激 (§10.2.4)

- 知覚や感情の動詞＝心理動詞 (psych verbs)

- (21) a. **経験者** (experiencer) : 感じたり、知覚したりする事物
 b. **刺激** (stimulus) : 知覚されたり、感情を引き起こしたりする事物
- (22) a. [経験者 Lassie] smelt [刺激 smoke].
 b. [経験者 Ruth] enjoyed [刺激 the cable car ride].
 c. [刺激 The movie] bored [経験者 Simon].

2.5 付加詞と統語的な主題役割の付与 (§10.2.5)

- 動詞などの述語がその項に主題役割を付与する。
- 付与される主題役割は、各述語の**主題格子** (theta grid) により指定されている。
- 付加詞の主題役割は、述語ではなく他の要素（例：前置詞）により付与される。

(23) [動作主 Tom] served [受け手 Sally] [対象 spaghetti] with [道具 a silver spoon].

- a. serve < 動作主, 対象, 受け手 >
- b. with < 道具 >

- 述語の項すべてが主題役割を持たなければならないとしたら、分量 (measure) や様態 (manner) のような役割も必要になる。

(24) a. The whole set costs [分量 two kilograms].

b. The bucket holds [分量 nine litres].

c. They treated him [様態 very well].

d. The dog behaved [様態 impeccably].

2.6 主題役割の名前の自己上下関係 (§10.2.6)

(25) 経路₁

a. 着点 (例: to the lighthouse)

b. 起点 (例: from the mirror)

c. 経路₂ = 開いた経路。経路₁のうち、着点と起点を抜いたもの (例: along the beach)

(26) 被動者 (patient)

a. 移動する対象 (例: Jones lifted [the tarpaulin])

b. 状態変化する対象 (例: Jones boiled [the glue])

c. 標的となる刺激 (例: Jones saw [the spots])

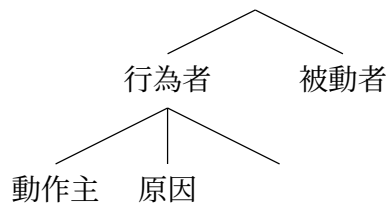
d. 被動者 = 接触や衝撃を受けるもの (例: Jones patted [Fido])

- さらに困ったことに、被動者 (Patient) が「主題」と呼ばれることもある。

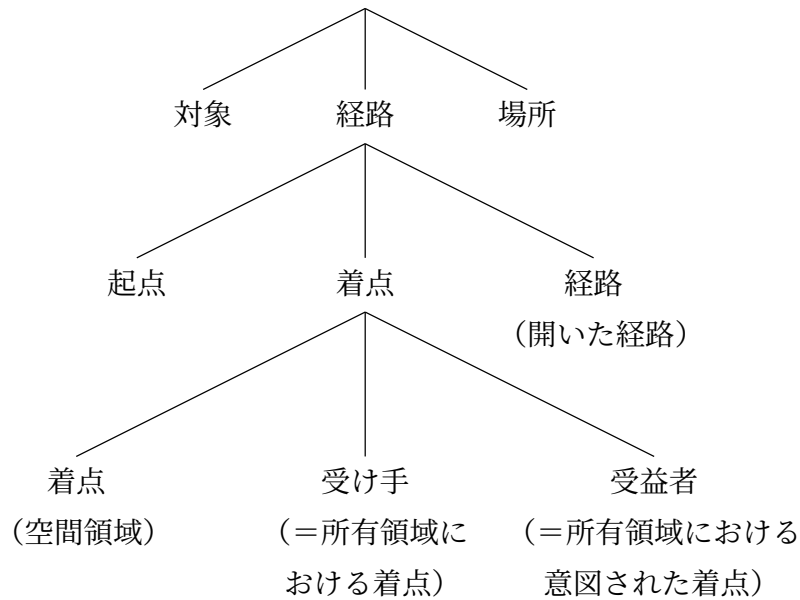
2.7 主題役割の層 (§10.2.7)

- 各種の主題役割は単純なリスト的關係にあるのではない。
- いくつかの層に分類できる (Jackendoff 1987)。
 - 行為層 (action tier): 出来事における動的さや自律性
 - 出来事層 (event tier): 空間的・比喩的な位置や変化 (移動)
 - 心理層 (psych tier): 心理的出来事
 - その他: 分量、様態など
- 1つの項が複数の層で主題役割を付与されることにより、全体として複数の主題役割を持つことがある (cf. 主題基準 (Theta Criterion) (29)).

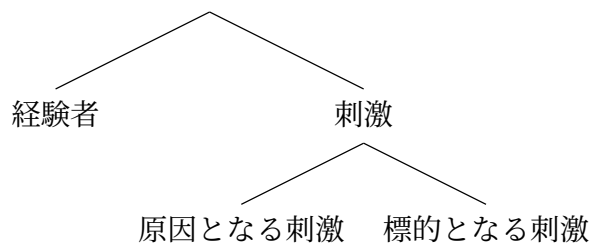
(27) a. 行為層



b. 出来事層



c. 心理層



(28) a. **Jones** dashed **out the door.**

行為層： 行為者-動作主

出来事層： 対象 経路

b. **Jones** absolutely loved **the circus.**

行為層： 行為者 被動者

心理層： 経験者 標的となる刺激

(29) 主題基準 (Theta Criterion)

各項は主題役割を1つだけ受け取り、各主題役割は1つの項のみに付与される。

Q. 次の文の括弧で囲まれた参加者の主題役割を分析しなさい。

(30) [Jones] seized [the ball].

(31) [Jones] sent [e-mails] [to everyone he knew].

(32) [The circus] thrilled [Jones].

3 デイヴィッドソンの行為文の分析 (§11.1)

(33) Davidson (1967)

行為動詞を含む文は出来事への指示を表現する。

→ 出来事に対する量化、出来事の修飾

副詞類の古典的扱い

(34) Jones buttered the toast [slowly] [with a knife] [in the bathroom] [at midnight].

- 1960年代の標準的な論理学の分析では、副詞類は述語に対する項として扱われていた。

(35) BUTTER(*j*, the toast, slowly, with a knife, in the bathroom, at midnight)

- しかし、butter が6つも項を持つ述語などということはない！
- 項と付加詞の区別は重要。項のみが述語の意味にある空所を埋める。

(36) デイヴィッドソン：副詞類は等位項のようなもの。 $p \wedge q$ が p を伴立する。

a. Jones buttered the toast with a knife \Rightarrow Jones buttered the toast.

b. Donna had ice cream and Laura had a Coke \Rightarrow Donna had ice cream.

- 大雑把に言うと、

(37) Jones buttered the toast slowly with a knife.

BUTTER(*j*, the toast) $\wedge p \wedge q$

[*p*: 'slowly'; *q*: 'with a knife']

- しかし、slowly や with a knife 自体は命題ではない。

出来事への指示

(38) Jones buttered the toast—I think it was in the bathroom.

—it はジョーンズがバターを塗るという出来事を指す。ジョーンズやトーストという個体を指示しているのではない。

- デイヴィッドソン：個体に加え、出来事それ自体も行為動詞の項の1つ。

(39) a. Jones buttered the toast [slowly] [with a knife] [in the bathroom].

b. $\exists e[\text{BUTTER}(j, \text{the toast}, e) \wedge \text{SLOWLY}(e) \wedge \text{WITH}(e, \text{a knife}) \wedge \text{IN}(e, \text{the bathroom})]$

e : 出来事に対する変項 (variable) (cf. 個体に対する変項 x, y, \dots 、特性に対する変項 P, Q, \dots)

c. 「出来事が存在する。それ出来事ではジョーンズがトーストにパンを塗る。その出来事はゆっくり起こる。その出来事はナイフを使って起こる。その出来事は浴室で起こる。」

Q1. 出来事のこのような論理式への翻訳からどのように (36a) の伴立関係が生じるか説明しなさい。

Q2. 出来事の変項を導入することで、動詞 butter それ自体の外延は $\lambda x \lambda y [\text{BUTTER}(y, x)]$ ではなくなる。では、どのようになるか？

4 新デイヴィッドソン主義の展開 (§11.2)

- デイヴィッドソンの元々の提案の後、伝統的に動詞の項とされてきたものを独立した等位項として切り離そうという考えが登場した。

4.1 直接項の切り離し (§11.2.1)

- (36a) の他に、以下の伴立関係も成り立つ。

(40) Jones buttered the toast \Rightarrow

a. Jones did some buttering

b. The toast got buttered

(41) 新デイヴィッドソン主義 (Neo-Davidsonian) の表示

a. Clive sang a song to Marcia.

$\exists e[\text{SING}(e) \wedge \text{AGENT-SOURCE}(c, e) \wedge \text{THEME}(\text{a song}, e) \wedge \text{RECIPIENT}(m, e)]$

b. Shota lives in Fuchu.

$\exists e[\text{LIVE}(e) \wedge \text{THEME}(s, e) \wedge \text{LOCATION}(f, e)]$

c. Shota bought a sweater in Fuchu.

$\exists e[\text{BUY}(e) \wedge \text{AGENT}(s, e) \wedge \text{THEME}(\text{a sweater}, e) \wedge \text{IN}(e, f)]$

- Q1. (41) の論理式を日常言語の文でパラフレーズしなさい。
- Q2. (41b) と(41c) はともに in 前置詞句を含むが、論理式が異なる。LOCATION(f, e)、IN(e, f) のように、一方は主題役割を用い、もう一方は IN という述語を導入している他、項の順序も異なる。これはなぜか？
- Q3. (41) において、動詞そのものの意味はどのように扱われているか？

4.2 動詞述語の価数 (§11.2.3)

- 新デイヴィッドソン主義の表示では、動詞の価数が明示的に示されない。そのため、項と付加詞が同等に扱われる。
- 多くの動詞は複数の項構造を持つので、これはよいことかもしれない。
例：Jones broke the pot と The pot broke
- 構文文法 (Construction Grammar)(Goldberg 1995) は、このことを真剣に受け止め、項構造が個々の述語により決定されるという広く受け入れられている想定を捨て去った。
- 構文文法では、構文全体が項構造を決定する。動詞は単に構文の持つフレームを埋めるだけに過ぎない。

- (42) a. Jones sent Delila a pet stoat.
b. 二重目的語構文
統語フレーム「SUBJ_a V_b OBJ1_c OBJ2_d」は
意味フレーム「動作主 a が V_b の状態で行動し、受け手 c に対象 d を持たせる。
- 新デイヴィッドソン主義の出来事意味論でも構文文法でも動詞を項を 1 つ取る様態述語とみなす。

5 出来事と知覚動詞 (§11.3)

- (43) 原形不定詞の補部
- a. Jones saw [Lina shake the bottle].
b. Jones heard [the gun go off].
c. Jones felt [the floor shake].
- 伝統的な論理学では括弧内の部分を命題と考えるだろう。
 - しかし、命題を見たり、聞いたり、感じたりすることはないので、この分析は不適格。
 - 実際に知覚するのは状況。出来事への指示により、上のような文を簡単に扱えるようになる。

- (44) a. Jones saw Lina shake the bottle.
 b. $\exists e \exists e' [\text{SEE}(e) \wedge \text{EXPERIENCER}(j, e) \wedge \text{STIMULUS}(e', e) \wedge \text{SHAKE}(e') \wedge \text{AGENT}(l, e') \wedge \text{PATIENT}(\text{the bottle}, e')]$
 c. 出来事 e と e' があった。
 e は見ること。ジョーンズが e の経験者。 e' が e の刺激。
 e' は振ること。リナが e' の動作主。ボトルが e' の対象。

- 刺激となる出来事 e' は断定されていることに注意 ($\exists e'$)。
- そのため、この分析は刺激となる出来事が実際に起こったことであることを捉えられる。

- (45) a. *Jones saw Lina shake the bottle* は *Lina shook the bottle* を伴立する。
 b. $\exists e \exists e' [\text{SEE}(e) \wedge \text{EXPERIENCER}(j, e) \wedge \text{STIMULUS}(e', e) \wedge \text{SHAKE}(e') \wedge \text{AGENT}(l, e') \wedge \text{PATIENT}(\text{the bottle}, e')]$
 $\Rightarrow \exists e' [\text{SHAKE}(e') \wedge \text{AGENT}(l, e') \wedge \text{PATIENT}(\text{the bottle}, e')]$

6 時制との相互作用 (§11.4)

- 相は状況時間 (TSit) とトピック時間 (TT) の関係。
- 状況時間は $\text{AT}(e, t)$ が成り立つような時間 t と分析できる。
- トピック時間と発話時点は、文脈に依存するのでここでは分析しないことにする。

- (46) 「健は走っている」(非過去、未完了相)
 $\exists t [\exists e [\text{RUN}(e) \wedge \text{AGENT}(k, e) \wedge \text{TU} \leq \text{TT} \wedge \underline{\text{TT}} \subset t \wedge \text{AT}(e, t)]]$
 $\approx \exists e [\text{RUN}(e) \wedge \text{AGENT}(k, e) \wedge \text{TU} \leq \text{TT} \wedge \underline{\text{TT}} \subset \text{TSit}]$

参考文献

- Aarts, Bas. 1997. *English Syntax and Argumentation*. Basingstoke: Mcmillan.
 Carnie, Andrew. 2007. *Syntax: A Generative Introduction*. Oxford: Blackwell, 2nd edition.
 Davidson, Donald. 1967. The logical form of action sentences. In *The Logic of Decision and Action*, ed. Nicholas Rescher, 81–95. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.
 Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: Chicago University Press. (河上誓作、早瀬尚子、谷口一美、堀田優子訳。2001. 『構文文法論 英語構文への認知的アプローチ』研究社出版.)
 Jackendoff, Ray. 1987. The status of thematic relations in linguistic theory. *Linguistic Inquiry* 18:369–411.
 Radford, Andrew. 1988. *Transformational Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.